



弁当の日

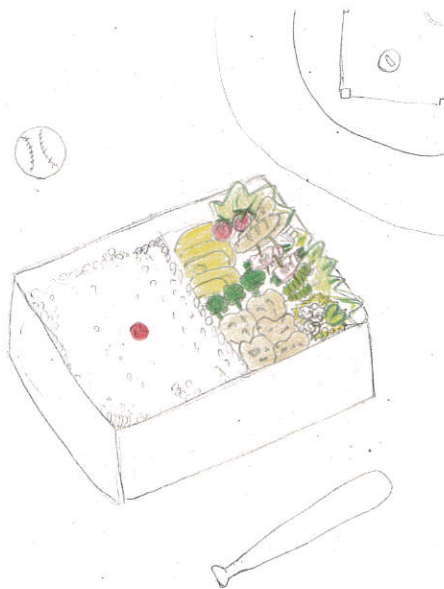
おいしい記憶の
エピソード募集

受賞作品集 2024



- 主催 株式会社共同通信社
- 共催 全国小学校家庭科教育研究会 全日本中学校技術・家庭科研究会
- 特別協賛 キッコーマン株式会社
- 協賛 日清オイリオグループ株式会社 ワオ株式会社
- 協力 東洋アルミエコープロダクツ株式会社
- 後援 文部科学省

👑 共同通信社賞 👑



市村 光希 (町田市立真光寺中学校 2年)

ホームラン弁当

甘い玉子焼が入っていた時、ホームランを打った。右中間の一番深いところに飛びこむ3ラン。芝生がまばらな球場だったけれど、ボールの白さは目立っていた。

その日以来、僕の弁当箱には、必ず甘い玉子焼が入る。ほんのり舌の上に乗っかってくる甘さは、舌の横を通り、全体をコーティングしていく。残った甘みに重ねて、隣のからあげに手をのばす。甘じょっぱい味が心地いい。アスパラベーコンに行く前に、マカロニサラダと上に乗ったプチトマトで小休止。ここでもう一度、黄色い王様の玉子焼を口に運ぶ。さっきとは違う、溶け出してきそうな白味が口の中にすべりこんで来た。上からご飯をほおぼる。まるで1番バッターから9番バッターまで、バランスのとれた打順のようだ。

でも一度だけ、塩味の玉子焼が入っていたことがある。母が風邪をひいてしまい、父が弁当を作ってくれた。同じ重さの同じ弁当箱。

「母さんが必ず玉子焼は入れろって言うから、特製ダシ巻き玉子。京風だぞ。」

父のあまりにもハツラツとした声に、僕は

「甘い玉子焼が…。」

とつぶやいただけで、何も言えなかった。

予想通り、その日の試合は3タコ。3打数無安打どころか、3三振。玉子焼が甘くなかったからだ。何だよ京風って…。2日目の試合の時は「手伝うよ。」と言い分けをして、僕も作ってみた。計量スプーンでおそろおそろ入れる。一応味見。「ガリッ。」「うえっ。」まずい。これじゃあまた三振だ。心配した母がパジャマのまま横に立った。手際良く玉子を割って、シャカシャカととく。砂糖を目分量でつまみ入れ、牛乳を少し、そして、醤油を少々。甘味が引き立つらしい。僕の作っていた茶色の箱は、色々な彩りを与えられ、お弁当箱に早変わりだ。そして最後に母特製の甘い玉子焼。レタスとウインナーの横に三角のとんがり頭をほこらしげに掲げる。きつと打てる。黄色はラッキーカラーになった。